内灘町立図書館が今後目指すべき理想の図書館像について

（代表）宮崎　成深（人間社会学域地域創造学類地域プランニングコース　二年）
稲木　奈々（人間社会学域地域創造学類地域プランニングコース　二年）
岩本　羽奈（人間社会学域地域創造学類地域プランニングコース　二年）
山口　杏梨（人間社会学域地域創造学類地域プランニングコース　二年）
指導教員
山岸　雅子（人間社会研究域　人間科学系　教授）

１．背景と研究目的

公共図書館は、調査や研究、教養、レクリエーションのために広い分野にわたり資料を収集し、地域住民に公開・提供することを目的としている。最近では資料だけではなく設備も充実しており、金沢市で新しく開館した「海みらい図書館」（平成 23 年 5 月 21 日開館）には 200 インチスクリーンと約 250 の観覧席がある交流ホールや、30 人程での会議も可能な集会室が設けられている。自動貸出機や自動化書庫も県内の公共図書館としては初めての導入で、駐車スペースも大きい。「海みらい図書館」は金沢市立図書館として、市民の幅広いニーズに対応しようとしている。公共図書館には、「海みらい図書館」のように広域圏を利用対象としている市立図書館もあれば、内灘町立図書館のようにより人々の生活に密着した、地元住民のための図書館もある。

本研究では内灘町立図書館を対象に、地元住民の身近な図書館として内灘町立図書館がいかにして地域住民の学びや憩いに応えていくことができるのかという、今後の在り方を探るために調査を実施し、その結果を検討した。

２．研究方法

内灘町立図書館の目指すべき姿を考えるにあたり、参考としてかほく市立七塚図書館、津幡町立図書館、金沢市立城北図書館、福井県立図書館、福井市立図書館、福井市立桜木図書館、愛知県立図書館の視察や、内灘図書館でのカウンター業務を通して図書館の現状把握を行なった。また、内灘町の概要の把握、関連施設（子育て支援センターや周辺の学童、公民館）の現状把握のため、現地調査を行なった。それらを踏まえて、図書館の利用者（大人・子ども）に図書館に対する満足度調査をアンケート形式で行なった。また、図書館利用者以外の図書館の認知度や利用頻度を把握するため、子育て支援センターや町内の学童保育クラブを対象にアンケート調査を行った。さらに図書館職員の意識を知るため内灘町立図書館及び近隣の町立図書館職員へのアンケートも実施した。

この調査で得られた様々な立場の住民の声、職員の声をもとに、改善提案や今後の在り方について検討し提言した。

3．研究成果と考察

（1）利用者に対する調査

平成22年8月6日、7日の2日間に内灘町立図書館の利用者を対象にアンケート調査を実施した。調査票は大人用と子ども用(小学生以下が対象)の2種類を作成し、大人用147票、子ども用61票を配布し、全票を回収した。

ⅰ.利用者の年齢・性別

（表1 ・利用者の年齢・性別）

	男	女	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
10代	8	15	23	15.6%
20代	4	7	11	7.4%
30代	12	24	35	23.8%
40代	8	20	29	19.7%
50代	7	10	17	11.5%
60代	10	8	18	12.2%
70代	6	3	9	6.1%
無回答	0	3	5	3.4%
計	54	90	147	100.0%

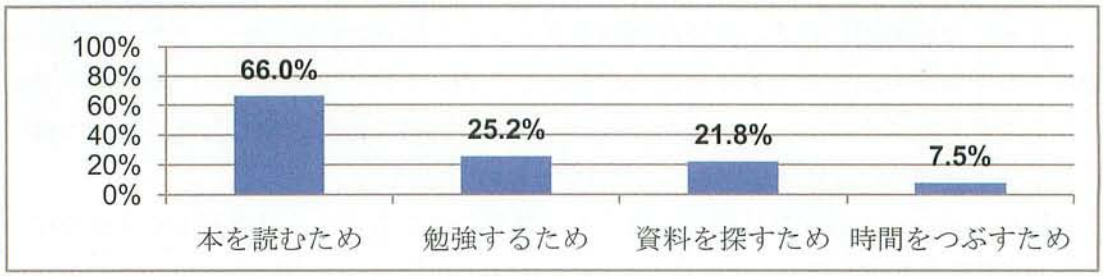
利用者は男性が36%、女性が61%という結果になり女性が多い。年代別にみると、もっとも多いのは30代の23.8%、次いで40代の19.7%であった。10代も15.6%と3番目に多い世代になるが、その間に挟まれる20代は7.4%と低い数値になっている。利用者層を伸ばすにはこの世代への図書館利用のアピールが有効になってくると思われる。また、高齢者の利用も多いため幅広い年代の人が使いやすい図書館づくりが必要である。

ⅱ.図書館までの交通手段

図書館までの交通手段を質問した結果、大人では「自動車」72.0%(113 人、複数回答可、以下同様)、「バス」1.3%(2 人)、「自転車」11,5%(18 人)、「徒歩」15.3%(24 人)、一方子どもは「自動車」77.0%(47 人)、「バス」1,6%(1 人)、「自転車」14,8%(9 人)、「徒歩」6.6%(4 人)であった。

図書館までの交通手段は、大人と小学生以下の子どもどちらも、自動車の利用が70%以上を占めている。自動車以外の交通手段の利用が相対的に少ないことから、自力で自動車を運転できない人は図書館へ来る機会自体が少ないと思われる。

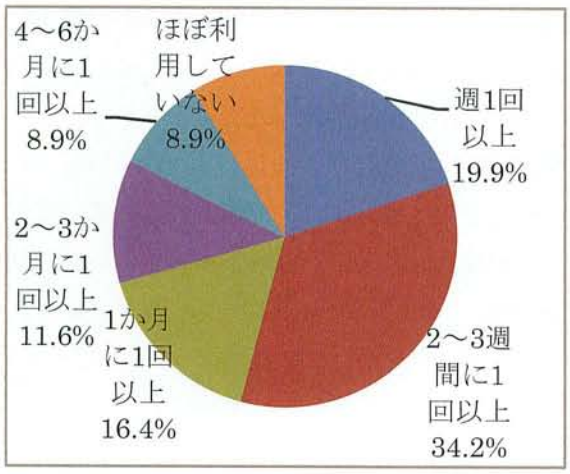
ⅲ.利用の目的



（図1・図書館利用の目的 N=177、複数回答可）

図書館利用の目的として、最も多いのは、「本を読むため」66.0%についで「勉強をするため」25.2%が挙がっている。回答者を 10 代のみに絞ると、「勉強をするため」が 82.6%にもなる。若い学生などは図書館を本を読む場というよりは、主に学習の場とみなしているとわかる。本を読んだり調べ物の場としてほしい図書館側と、図書館を学習の場とみなす学生との間に、非常に大きなギャップが生まれている。

ⅳ.利用頻度



（図 2・利用頻度 N=146）

図書館の利用頻度について質問したところ、最も多いのは「2~3 週間に 1 回以上」利用の 34.2%となった。週 1 回以上と 2~3 週間に 1 回以上と 1 か月に 1 回以上の利用者の合計は 70.5%になり、大多数を占める。逆に一部の決まった利用者のみの利用が多いとも言えるので、残り 3 割ほどの利用が少ない層の利用を増やすことが利用者の増加に繋がるはずである。

ⅴ.今後の内灘図書館に必要なもの

（表 2・今後の内灘図書館に必要なもの・複数回答可）

	度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ
本の充実	92	39. 1%
読書スペース	35	14. 9%
自習スペース	24	10. 2%
雑誌の充実	21	8. 9%
わかりやすい掲示	18	7. 7%
職員の対応の良さ	14	6. 0%
上記以外	10	4. 3%
子どもの読み聞かせ	9	3. 8%
無回答	6	2. 6%
郷土資料の充実	5	2. 1%
その他	1	0. 4%
計	235	100. 0%

今後の内灘図書館に必要なものとして挙げられたのは、もっとも多いものが「本の充実」の 39. 1%であり、ついで読書スペースと自習スペースの充実となり、これらは合わせて 25. 1%であった。

空間の大きさは限られているため全てを実現することは非常に難しい問題であるが、今後も利用者からの意見を聞きつつ優先するものを考え、利用しやすい空間をつくっていくことが求められる。

VI. 子どもが読みたい本を見つけられるか

子どもに対して図書館内で読みたい本を見つけられるか質問したところ、「見つけられる」61%、「時間はかかるが見つけられる」29%、「見つけられない」10%の計 65 回答を得た。半数以上の子どもが自分の読みたい本を見つけられると答えたものの、今後目的の本を探すのに時間がかかる子どもや、見つけられない子どもを減らすためにも、保護者にも子どもにもどちらにも利用しやすい子ども向け図書コーナーにする工夫が必要である。

(2)子育て支援センターに対する調査

内灘町子育て支援センターとは、常駐の保育士スタッフがおり、子どもの遊び場の提供、育児情報の提供、子育てサークルの支援、育児相談を行う施設である。この子育て支援センターには、内灘町民はもちろん、近隣の市や町からも多数の利用がある。

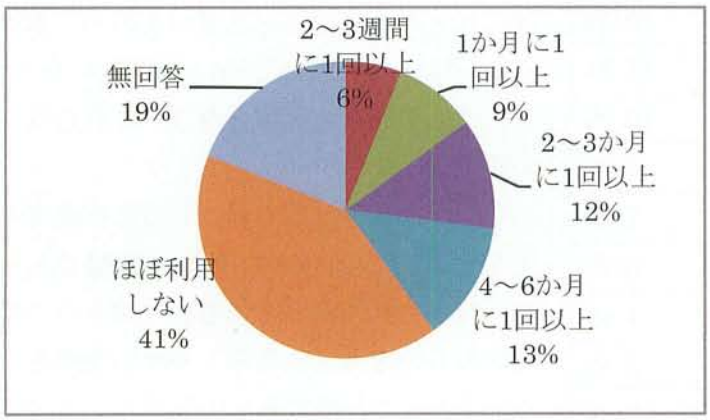
内灘町子育て支援センターは、内灘町立図書館からみて金沢市よりに位置している。

内灘町や近隣の市や町の子育て世代、及び、その子どもたちの、内灘町立図書館の認知度や利用度などを知るために、センター利用者を対象にアンケート調査をおこなった。調査は、平成 22 年 8 月 5 日におこない、50 名に配布し、50 名から回収した。調査対象者の性別は全て女性であった。

i. 内灘図書館の認知度

「内灘図書館を知っていますか」と質問したところ、「知っている」と答えたのが 64%(32 名)、「知らない」と答えたのが 36% (18 名)となった。内灘図書館の認知度は、64%と、決して高いとはいえない。

ii. 利用頻度



(図 2・子育て支援センター来館者の内灘町立図書館利用頻度)

図書館の利用頻度についてきいたところ、「ほぼ利用しない」が 41%と非常に多い。次いで「4～6 か月に 1 回以上(13%)」となり、利用頻度の低い順番に多い。内灘図書館は、近隣の子育て世代の利用が少ないということがうかがえる。

(3) 学童保育クラブに対する調査

内灘町の住民の小学生を対象にした調査では、多くの小学生がそれぞれの地域の学童保育クラブに所属している。そこで、内灘町にある 7 つの学童保育クラブのうち、比較的図

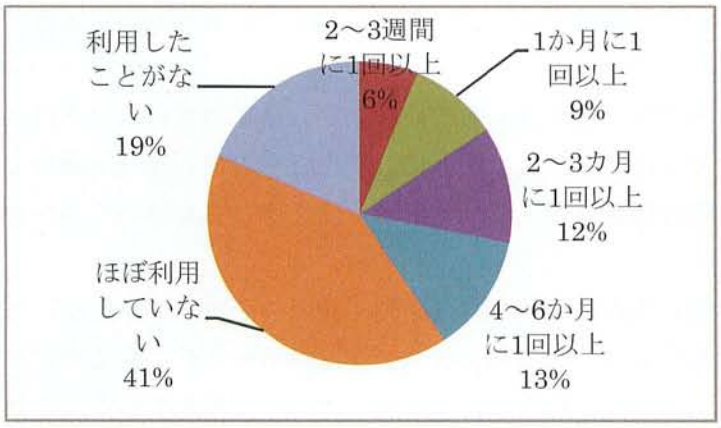
書館の近くにある内灘学童保育クラブと、鶴ヶ丘第一保育クラブにおいてアンケート調査をおこなった。調査は平成22年8月8日におこない、86名に配布し、86名から回答を得た。

調査対象者の学年は、一年生34.8%(30名)、二年生 36.0%(31名)、三年生 24.4%(21名)、四年生 4.6%(4名)であった。性別は、男 53.4%(46名)、女 46.5%(40名)であった。

ⅰ．内灘図書館の認知度

「内灘図書館を知っていますか」と質問したところ、「知っている」と答えたのが 64%(55名)、「知らない」と答えたのが 36%(31 名)となった。内灘町民でありながら、内灘図書館の認知度は決して高いとはいえない。

ⅱ．利用頻度



(図3・学童保育クラブの児童の内灘町立図書館の利用頻度)

利用頻度について聞いたところ、「利用したことがない」及び、「ほぼ利用していない」と答えた人が 60%であり、次いで利用頻度の低い順番に多い。このことおから、内灘町の学童に通う小学生は、内灘町立図書館をあまり利用していないということがわかる。

ⅲ．保護者の読み聞かせの経験

保護者からの読み聞かせの経験について聞いたところ、「よく読んでもらう」が15.1%(13名)、「読んでもらったことがある」が60.4%(52名)、「読んでもらったことがない」が24.4%(21名)であった。

ⅳ．知っている日本昔話の数

日本昔話をどれだけ知っているのか聞くために、「桃太郎」・「一寸法師」・「さるかに合戦」・「浦島太郎」・「かぐや姫」・「舌切すずめ」・「花咲か爺さん」・「金太郎」・「こぶとり爺さん」・「かちかち山」・「鶴の恩返し」・「おむすびころりん」の日本昔話を計 12 冊列挙し、知っているものに丸をつけてもらった。

12冊すべてを知っている人が50.0%(43名)、11冊知っている人が13.9%(12名)、10冊知っている人が4.6%(4名)であり、これらの合計は68.5%と、ほとんど知っている人が多かった。しかし、対照的に1冊も知らない人が2.3%(2名)、1冊しか知らない人が5.8%(5名)

と、少数ではあるが、知っている日本昔話が極端に少ないという人もいた。

また、保護者からの本の読み聞かせの経験と知っている日本昔話の数の関係をみたところ、保護者からの読み聞かせの経験が豊富(「よく読んでもらう」「読んでもらったことがある」)な人は、知っている日本昔話が平均 10.0 冊だったのに対し、保護者からの読み聞かせの経験が少ない(「読んでもらったことがない」)人は、知っている日本昔話平均 8.5 冊となった。この結果から、保護者からの読み聞かせの経験の有無によって、知っている日本昔話の数が異なることがわかる。

(4) 図書館職員に対する調査

図書館のあり方は、図書館職員の意識におおいに左右され、利用者の意識と乖離していれば、利用者の満足度に影響を与えると思われる。そこで、図書館職員が考える、目指すべき図書館とはどのようなものなのか、改善すべき点はなになのかを調べるため、平成 22 年 8 月 4 日に、内灘町立図書館、及び近隣の公立図書館職員に対して、自由記述によるアンケート調査をおこなった。

アンケート調査の結果、改善すべき点としては、書庫がせまい、建物の老朽化などのハード面が主に挙げられていた。この点については、同様に、利用者へのアンケート調査でも、エレベーターの設置場所や、防音設備など、ハード面で不便を感じる点はいくつか挙げられていた。

図書館員に対する調査の中で、最も図書館職員と図書館利用者とのギャップが見られたのは、学習スペースに対する考え方である。図書館職員は、学習スペースを、あくまで付随サービスであり、優先順位は低く、あまり好ましい使い方ではないと考えている。これに対して、前述のように大半の学生の図書館利用者の目的は、学習スペースで勉強するためであると答えていた。私たち大学生も、これまで、小学校、中学校、高校と、図書館を学習スペースとして利用してきており、身近な図書館として学習スペースとしての利用を考慮した図書館づくりが望まれる。

4. 結論

平成 22 年 8 月 13 日、内灘町立図書館にて、調査結果の報告及び提言をおこなった。

- 内灘町立図書館の子どもの認知度の低さ、利用頻度の少なさは問題である。読み聞かせ会を定期的に開催するなど、子どもの利用を増やし、学習の場として定着させるための工夫がなされることが望ましい。
- 学習スペースは、図書館職員と図書館利用者との間で、意識の大きなギャップがみられた。今後、学習スペースのあり方について検討すべきである。
- 図書館の目指すべき姿を、図書館職員と図書館利用者が共有することは重要である。今後、意見交換する場を設けるべきである。